

<北海道熊研究会報> 第4号 2013年 3月 21日

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 PETER NICHOLS ピーターニコルス氏

Web-site は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓蒙活動を行う。

この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

[I] 「西興部でアルビノ(赤目白毛)の熊確認」記事への質問

への門崎の回答です

「記事の概要」

昨年(2012年)、西興部村から滝上町札久留サクルに至る地域で、目(瞳孔)が赤く、鼻先の皮膚(鼻鏡と言う)も黒色で無く、全身白色毛の熊が見られたとの情報があった。この熊は体表にある黒色素であるメラニン色素を欠いた「アルビノ albino=ラテン語で白の意」の個体で、北海道での熊での事例としては2例目である。最初の記録は「松前志1781年」と言う書に、今から338年前の延宝3年(1675年)に、「熊の純白のもの出行、其の皮を江府(江戸幕府)に献じたり」とある記述である。その皮は行方不明で検証できないが多分アルビノの熊と思われる。メラニン色素はアミノ酸の一種チロシンが変化重合して生ずる色素で、この色素が欠損するとアルビノに成る。欠損するのは、この反応経路の一部が損なわれてメラニン色素が形成されない事によると言う。命には別状はない。目が赤く白毛の兎や鼠もこのアルビノである。

<質問1>

・江戸時代にアルビノらしきヒグマの発見例があるとのことですが、今回はこれに続く大変珍しい例であって、頭数はそれほど多くは、ないということでしょうか。また親熊

もアルビノの可能性がありますか。

[回答]

極めて稀なことです。明確に確認されたのは、今回が初めてです。白い熊を見たと言うハンターも以前居たようですが、いずれも、其の熊について研究者により、確認はされておらず。アルビノか否かは不明です。今回のアルビノ個体は病気でメラニン色素欠損になったものと私は考えています。親はアルビノでは無かったと思います(アルビノの熊は見られて居ないので)。この個体が繁殖した場合、その子もアルビノになるか否かは不明です。これが劣勢遺伝で、遺伝する場合は、メンデルの法則で形質が現れますが、熊は子1～3頭産みますが、その中に、劣勢形質の子が、必ず現れるとは限らないからです。

<質問2>

・国後および択捉島にはアルビノではなく、白いヒグマがいるという話もありますが、事実でしょうか。

[回答2] 瞳孔が赤くありませんから、アルビノではありません。その熊は白毛が多い個体で、北海道ではこれを、「銀毛」の熊と呼んでいます。

【II】札幌市への要望

① 熊が出没した場合、如何なる熊が何の為に出没しているのか、的確に見極め殺さない方法で対処されたい。出没する熊には必ず目的がある。

一昨年(2011年)と昨年(2012年)に、南区や西区の住宅地に頻繁に出て来た熊はいずれも満2歳未満の母から自立させられた若熊が、「住宅地が如何なる所か」好奇心で学習に出て来ていたのであった。2歳未満の熊が、人を襲った事例は過去に無い。故に大騒ぎは慎むべきである。

② 「芸術の森の野外美術館」付近に熊が出没したとして、大騒ぎして昨年も幾度か閉園しているが、解決策として、早期に会場を有刺鉄線柵で囲う策をすべきである(国定滝野すずらん公園での事例がある)。

③ 熊が住宅地や耕地に出て来た場合、一時的にその場所に電気柵を設置し、再出を予防する対策を講ずること。

④ 奥山で熊の毛を取り、DNA鑑定するなどの調査は不要で、市民にも熊にも無益な税の無駄遣いであることを、強く指摘したい。(了)